



連・載・コ・ラ・ム

子育てを考える

第1回

人の幸せの種まきは「胎児、0,1,2歳時期の育児」に

社会福祉法人未知の会 花ノ宮保育園 園長 野町 文枝

絵本の好きな子どもは絵本をたくさん読んでもらった子どもです。

遊び上手な子どもはたくさん遊んでもらった子どもです。

人と上手に関われる子どもは、いっぱいかわいがられた子どもです。

いっぱい愛され大切にされたから、人を愛し人を大切にできるのです。

「寝ること・食えること・遊ぶこと」がすべてである生まれて間もないこの時代に手間ひまかけることは、子どもがしあわせな人生を手にする大きな鍵になります。

少子高齢化を食い止めるため、多様な保育サービスが提供されるようになりました。

その保育現場で私がたえず問い続けてきたことは、子どもが子どもの時間を子どもらしく生きる“子ども自らの育ち”でした。

反社会的な子ども、非社会的な子どもが増え続けています。



“気になる子ども”は実は”気にかけてあげねばならない子ども”なのです。

0,1,2歳時期の子どもたちはことばにできない気持ちを長泣き、乱暴、大人を困らせることなどいろいろな表現で伝えます。

自己選択・自己決定できる子どもになるように、私は恐れにも似た気持ちで、その方たちに向き合おうと努めてきました。子どもは自分の気持ちをわかってもらえた時、ずっと感情を納

めていきます。適切な対応をしてもらえた子どもは、愛着関係が形成され自己肯定感(*)を高めていきます。しかし、そうではない場合は、不安や不満な気持ちをずっと引きずってしまい、小学校に入って本人も周りもみんなが苦しむのです。

その大切な時期を担っているお母さんは、まだ母親としての経験も浅く、多くは在宅で過ごしています。子どもは泣くもの、思うようにならないもので、長泣き、イヤイヤ、こだわり、いたずら、汚すこと、みんな子どもが育っていく大切なみちすじですが、それを知らないと心配と不安が募り、子どもとおおらかな気持ちで向き合えません。



「今日は一体何をしたのかしら」と、ふとむなしさがよぎる日々の連続かもしれません。が、お子さんの寝顔を見つめ

てください。今日一日その命を守ったのはお母さんです。

「24時間命を守り続ける」大仕事は、どんな仕事にもまさる未来への貢献です。子育て中のお母さんをみんなで支えていきたいものです。

※自己肯定感:あるがままの自分を受け入れる安定した感情

野町 文枝(のまち ふみえ)

1966年 大学卒業後、東京都にて小学校に勤務

1969年 高松に移り住み、2年間の幼稚園勤務

1975年 春日保育園勤務

1992年より、自然界の汚染は食物連鎖で子どもの体を蝕んでいくことを知り、給食に安全な食材の提供と、EM(有用微生物群)による環境浄化活動に取り組む。

1996年 地域子育て支援センター事業開始

2010年 花ノ宮保育園勤務

